

アン・マリー・マクドナルド作品群
(1990-1996) に関する覚書
——小説『ひざまづいて』とふたつの戯曲の関連性をめぐって——

荒 木 陽 子

はじめに

アン・マリー・マクドナルド (Ann-Marie MacDonald, 1958-) は、1980年代からカナダを中心に女優、作家として活動を続けている。近年では性的マイノリティのスポークスパーソンとしてのメディア露出も多い。その背景には、2003年に同性婚を果たした演出家のアリサ・パーマー (Alisa Palmer, 1963-) との間にむかえた、ふたりの養子との生活の影響下で執筆された小説『おとなの兆候』 (*Adult Onset*, 2014) の出版がある。しかし、彼女のキャリアの中心とえば、やはり戯曲や小説の執筆、そして同分野の後進の指導を中心とした、作家としての活動であろう。2017年現在マクドナルドは、モントリオールのコンコーディア大学モーデカイ・リチャード・リーディング・ルームのライター・イン・レジデンス、および国立演劇学校で演技および戯曲執筆のコーチを務めている。

1988年に初演され、カナダ総督賞 (戯曲部門) を受賞した『おやすみデズデモナ (おはようジュリエット)』 [*Goodnight, Desdemona (Good Morning, Juliet)*] をはじめとして、マクドナルドの創作活動の活動初期には戯曲が多い。しかし、1996年に出版されコモンウェルス処女小説賞 (カナダおよびカリブ地区) をはじめとする各賞を受賞したのち、2002年に世紀を跨いで「オブラのブック・クラブ」の選書として選ばれた、『ひざまづいて』 (*Fall on Your Knees*) の商業的・批評的成功を契機に、その活動は次第に小説へ移行していく感がある。本試論はこの『ひざまづいて』を、先行する二つの戯曲——1995年初演の共作、『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』 (*The Attic, the Pearls & Three Fine Sisters*)、1990年初演の『アラブ人の口』 (*The Arab's Mouth*) ——と比較する。その過程で、これらすべての作品で効果的に用いられた屋根裏部屋のある屋敷という題材に注目しながら、『ひざまづいて』とそれぞれの戯曲の関連性及び非関連性を検討し、小説にあらわれるテーマの発展経緯を明らかにしてゆきたい。

カナダの有力紙『グローブ・アンド・メール』(*The Globe and Mail*)に「史上最もワイルドかつ濃厚な」シェイクスピア劇の「フェミニスト的再評価」と評された『おやすみデズデモーナ』以来、マクドナルドはほぼすべての作品で「女性」、そして多くの作品で性的マイノリティの生き方を問うてきた⁽¹⁾。それ故に彼女の作品はジェンダー学、クイア・スタディーズ的な見地から研究されることが多い。加えて、これまでの学術研究は、『ひざまづいて』に集中している感がある。特にゴシック色の強い同小説は出版以来、しばしば抑圧されたマイノリティが抱えるトラウマをめぐる、心理ゴシックとしても研究されてきた。これらの研究傾向はともに、2009年に出版されたシンシア・シュガーズ (Cynthia Sugars) とゲリー・ターコット (Gerry Turcotte) が編集したカナダのゴシック文学の研究書『成仏しない遺物』(*Unsettled Remains: Canadian Literature and the Postcolonial Gothic*)に所収された、シェリー・カルパージャー (Shelly Kulperger)、およびアテフ・ラウイエン (Atef Laouyen) らの研究に明確に読み取ることができる。本研究は、前述の通り、これまでのマクドナルド研究が、ジェンダーやセクシュアリティ、そして小説『ひざまづいて』に関するものに偏っている点を問題視する。そして、演劇、小説といったジャンルを横断する作品のイントラテクスチュアリティに注目しながら、繰り返し彼女の作品にあらわれるゴシック的テーマを検証する。

なお、本稿は読みやすさを優先するため、特に必要がない場合はできるだけ原典が外国語である場合でも、和訳を用いることとする。また、表記がない場合は拙訳であることをあらかじめここに述べる。

1. ケープ・ブレトン島の幽霊屋敷——『ひざまづいて』におけるパイパー家の場合

読者に英語系白人男性が描いた「公式」の北米の歴史の信ぴょう性を疑わせるために、複数の視点から、非直線的に語られる複雑かつ実験的な小説『ひざまづいて』は、単純な要約を退ける。しかし、本稿において作品比較のベースとして用いるにあたり、ごく簡略的に紹介することを試みたい。

マクドナルドは旧西ドイツのカナダ空軍基地で生まれ、帰国後もカナダ国内の基地を家族とともに転々とした。そのため、彼女は前述のオプラのブック・クラブの公式ウェブサイトに掲載された2002年のインタビューをはじめとする様々なインタビューで、家族の間で語られた物語や記憶、

そして所有していた書籍などを除いて、特定の土地に根差したルーツを持たないことを語っている。このようなマクドナルドが『ひざまづいて』の舞台として用いたのは、自らも子供のころから繰り返し訪れ「お古のルーツ」(secondhand roots)として認識する、両親の故郷 (Tihanyi 23)、ノヴァスコシア州ケープ・ブレトン島のシドニー近郊、および現在のニュー・ウォーターフォードである。彼女の父はケープ・ブレトンの土地に古く根ざしたスコットランド系、母はレバノン系の移民2世である。彼女の両親の文化的背景は、『ひざまづいて』の創作にも影響を与えている。また、物語の時代は19世紀末から20世紀半ばに設定されているが、この時間的広がりとは同地域の基幹産業である炭鉱業・鉄鋼業とともに勃興した同コミュニティの栄枯盛衰とかさなる。

本作品が商業的成功を収めた理由の一つは、オーディエンスを楽しませるエンターテイナーとしての役割を強く意識するマクドナルドが、虐待、人種、そしてセクシュアリティをめぐる難題の数々を、現代を生きる読者に訴える、わかりやすいかたちで提供したことにもとめられるであろう。マクドナルドは作品中、婦女暴行、幼児性愛、駆け落ち、レズビアン・ラブ、近親相姦といったメロドラマ的素材を、流血や亡霊などのゴシック仕掛けで脚色する。

以下にあらすじをまとめる通り、物語はパイパー一家を中心に展開する。親世代の反対にもかかわらず、19世紀末に10代の若さで、貧しいスコットランド系男性ジェームズ・パイパー (James Piper) と裕福なレバノン系女性マテリア・マムード (Materia Mahmoud) は結ばれる。ふたりは20世紀の初頭に3人の娘をもうける。しかし、ジェームズは、人種差別および幼児性愛の傾向があり、白人らしい見かけの長女キャスリーン (Kathleen) を偏愛する。やがてジェームズは、成長しニューヨークで音楽修行をしていた長女の黒人女性との同性愛を見とがめ、自らの娘をレイプする。そして、この関係をもとに生をうけた、ジェームズにとっては孫でもあるリリー (Lily) は、出産で命を落とした母亡き後パイパー家の四女として育てられる。やがてリリーは成長し、母の現身となり、世代を超えてニューヨーク在住の母のかつての恋人である男装のジャズ・ミュージシャンのもとに身を寄せ、血のつながらない家族を形成する。そして物語の最後には、彼らは民族音楽研究者として成長した、パイパー家の3女フランシス (Frances) の私生児をニューヨークに迎え、彼にパイパー家の年代記を伝え、一応のハッピー・エンドをみる。

物語が語られるニューヨークの雑多な複合住宅とは対照的に、ノヴァス

ロシアのパイパー家の家屋は、一見立派な一戸建てである。ただそれは、裕福な商人であるマテリアの父が、10代前半の若さで父の意に反して貧しい白人ピアノ調律師と駆け落ちした娘を、死んだものとして家族や地域社会から絶縁するために、当時は隣家もほとんどない寒村ロー・ポイントに新築した一種の拷問器具でもある。また、マテリアの家族にとってはこのパイパー家の存在自体が秘め事である。後に幽霊屋敷として機能することになるその建物は、ゴシックの怪物が、それが覆い隠す秘密の表出としてグロテスクに描かれるのと同様に、家族の秘密を覆い隠すがゆえに不気味な様相をたたえる。

裏に大西洋を臨む絶壁と、きれいとは言えない水路、不気味な案山子やペットの黒猫の墓を配するゴシック的環境に建てられたこのパイパー邸は、現代カナダ・ゴシック文学の先人、ロバートソン・デイヴィーズ (Robertson Davies, 1913-95) がエッセイ「幽霊屋敷設計ガイド」で示した、文学作品の設定に適した幽霊屋敷のモデルを忠実に再現したかのような、屋根裏部屋と地下室を兼ね備えた建築物になっている。1960年のオンタリオ建築家協会にむけたスピーチが元であるこのエッセイで、デイヴィーズが現代化の進むカナダの都市部で絶滅を危惧していた屋根裏部屋のある家は、本稿が取り扱うすべての作品で取り扱われている。彼の幽霊屋敷論は、『増補改訂版ゴシック入門』の「英系カナダのゴシック」という項目でも引用されている重要な情報であるので、このエッセイの一部を、少々長いですが、カナダ・ゴシック文学に明るい日本人研究者長尾知子の訳でここに引用したい。なお原文の「.」は「。」に、「,」は「、」に都合上変更する。

たとえば、昔なつかしい屋根裏部屋。階下では郷愁にかられることもないという心理的事実も証明済みだ。それに地下室は、殺人や、暗闇のなかでナイフを振り回したり、古女房を壁に塗りこめたりにもってこいだ。こんなにすてきな間取りの家は相当大きなものになると反対されるのもごもっとも。けれど、持ち主が死んで家がいらなくなったら、そのまま立派な葬儀場になるというものだ。

(Davies 84, ターコット 362)

パイパー邸の設計は見事にこのデイヴィーズのガイドに沿うものである。やがて、その地下室では、低年齢での出産を重ね、精神と肉体のバランスを失い、「まったくのゾンビ」(34)としてジェームズの目に映るよう

になるマテリアが、時に監禁され、虐待を受けることになる。そして屋根裏部屋は、恋人から引き離され、父によるレイプで妊娠したショックから言葉を失ったキャスリーンを、若い妹たちや隣人たちから病気として隠し、双子の逆子の出産に挑ませる場所となる。ただ、マテリアによるキッチン鋏を使用した帝王切開の結果、キャスリーンは屋根裏部屋で命を落とす。キャスリーンの出産のシーンは、本作品でも特に典型的にゴシック的な人体の切断や流血などのゴアを含む。そして、その奇妙さを強調すべく、複数の登場人物の視点から執拗に描かれる。

そして悲劇はキャスリーンの死に終わらない。リリーの双子の兄弟アンブローズ (Ambrose) は、姉/叔母のフランシスによる洗礼中の事故で水死する。そして、この時、孫を長女の腹からとりあげたマテリア自身も数日のうちに、台所のガス・オープンに頭を入れたまま、30代前半の若さで掃除中の事故とも自殺ともとれる不可解な死を遂げる。こうして、数日間のうちに、3人の家族の「棺桶」と化したこの家屋の周りに、赤ん坊の亡霊を憑つかせることによって、パイパー邸は幽霊屋敷として完成をみる。

次章以降では、ここでみた屋根裏のある幽霊屋敷のモチーフを中心に、本章で言及された『ひざまづいて』に見られる文彩が、先行する戯曲の中で、どのようにあらわされていたのかを時代を遡り、検証していきたい。

2. 屋根裏部屋の箱の秘密——『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』の場合

マクドナルド特集を中心に据えた『カナダ・アメリカ研究』(2005年第2号)に掲載された、メラニー・ロックハート (Melanie Lockhart) とマクドナルドの1998年のインタビューによれば、『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』は、当初ミュージカル作品として書き始められたという『ひざまづいて』の出版前年に(148)、初演を迎えた戯曲である。マクドナルドはこの作品の6人の執筆者のひとりである。1990年初演の『アラブ人の口』脱稿直後に執筆の着想を得たという『ひざまづいて』の完成には5年程度を要したこと (Tihanyi 21-22)、戯曲の第9場の屋根裏のシーンで登場人物が作中で最近読んだ本のタイトルとして『ひざまづいて』のタイトルの一部に言及すること (“I read that *Fall on Your...*”) を考えると(64)、ふたつの作品の執筆期間は重なっている。そこで、本章ではこれらふたつの作品の関連性を検討してゆきたい。

本戯曲は現代トロントに生きる3人の姉妹が、父の死を見届けるべく実家に集まり、父の死後、遺言に従い追悼パーティを準備、実施するまでの一週間を描く。現代トロントを舞台とする本戯曲と、過去のケープ・ブレトンを舞台とする小説の間に、関連性を見出すことは、一見困難に思われるかもしれない。しかし、三姉妹を中心に据える設定とともに、屋根裏部屋存在は、二つの作品を結びつけているように思われる。ゴシック物語では、しばしば繰り返し登場人物を苦しめる過去の記憶が登場する。ファイン家の屋根裏部屋も、そこに隠された家族の過去の物品を通して、彼らが姉妹間のパワー・ポリティクス、そして性の在り方をめぐる諸問題を熟考する舞台として機能することは興味深い。

先ほど、ファイン家の三姉妹が『ひざまづいて』のパイパー家でジェームズとマテリアの間に生まれる3人の娘たちの姿と重なる点を示唆したが、ふたつの作品の類似点はそれだけではない。登場人物が生活する時代、彼らが年齢・職業・属性等は異なるが、それぞれの姉妹のうち一人ずつ——歌手修行中のキャスリーン・パイパーとビジネス・ウーマンのジェーン・ファイン (Jayne Fine) ——は、性的マイノリティとして設定されている。ジェーンは現在女性と交際中でありながら、パーティでは妹の元夫とキスをするバイセクシャルである。またそれぞれの姉妹の3人目、つまりエンターテイナー兼セックス・ワーカーのフランシス・パイパーと芸術家のジェリー・ファインは、創作活動で身をたて、手段こそ異なるものの、自らの意志で通常の一夫一婦制の婚姻関係という枠を超えて、独身女性として子を持つことを選択する。フランシスは子を持つことを目的に、父の仕事を手伝う運転手の黒人男性と一夜限りの関係を結び、後に2女のメルセデス・パイパー (Mercedes Piper) の死後、パイパー邸を相続することになるアロイス (Aloysius) をもうける。一方で、ジェリーは父の男性看護師から精子の提供を受け、姉妹と同じJから始まる名前を持つジェス (Jesse) を授かるのである。ジェスがここに加わることで、ファイン家にもパイパー家のリリー同様に、4人目に加わる点は興味深い。さらに、一見「正常」に思われるメルセデス・パイパーとジョジョ・ファイン (Jojo Fine) を、恋に破れた異性愛の独身教育者として位置づける点にも、両作品の共通点を見出すことができる。

屋根裏部屋はこのファイン家の三姉妹の抱える問題を検討する場となる。前章で述べた通り、惨劇の現場となるパイパー邸の屋根裏には、ホープ・チェストが配置されている。それは両親に勘当されたために嫁入り道具を持たなかったマテリアのために、ジェームズが製作したものである。

そして、そのホープ・チェストの中には、家族の写真や衣装、洗礼服などの秘密の品が収められている。パイパー家の姉妹たちは、折に触れて屋根裏部屋に忍び込み、隠ぺいされた物品に触れることで、自らの記憶の中に抑圧されている家族の過去と対峙し、それを様々な方法で解放する。そして、解放された過去は、語り手によって物語に紡がれていく。

一方、ファイン家の屋根裏部屋には、パイパー家のそれのように、血まみれの妊婦や黒猫の死体のような、あからさまにゴシック的な仕掛けはない。あえて挙げれば、父の死、姉妹喧嘩の過程でケーキ・ナイフが登場する点や、ジェリーの服が屋根裏のトランクにひっかかり、動けなくなる点が恐怖を呼ぶだろうが、実際の流血はない。しかし、ファイン邸の屋根裏部屋も、姉妹が抑圧した家族の記憶の隠ぺい先である点は重要である。そして、ファイン家の屋根裏部屋にもホープ・チェストではないが、トランクという「箱」が存在し、それを中心として屋根裏部屋には家族の過去の品々が納められている。

特筆すべきは、その箱には、姉妹がかつて屋根裏で互いを——特に末妹をトランクに閉じ込めたりすることによって——いじめながら繰り返したティー・パーティをはじめとする「ごっこ遊び」の道具として使用した、ドレスやタキシード、パールなどの思い出の品が詰まっていることであろう。前述のとおり、ゴシック物語では過去の記憶が繰り返し登場人物を苦しめるが、この物語では子供時代の屋根裏部屋の遊びの記憶がその役割を果たす。当時の姉たちのいじめの標的である末娘のジェリーは、現在ではドイツで個展を開催できる程度に成功した芸術家となっている。ジェリーは、実際には父の介護者を務め、姉妹のうちでもっとも現実的であるのにもかかわらず、姉たちには相変わらず、生活のすべや財産をもたずに父の家に住み続ける無能な妹として扱われている。

遺言をもって、ジェリーを家の相続者として指定したうえで、姉妹全員に知人らを招き、「最後に一度」だけ家族を演じさせる筋書きは、この状況を姉妹たちに熟考させるための父の仕掛けである(58-59)。父は、かつての屋根裏のパーティごっこを階下に再現することで、姉たちに自らの現実を直視させる。このパーティを通して、姉たちは、本当の敗北者は人生の半ばになっても、現実を受け入れられない、彼らであることを認識するのである。長女のジョジョは、大学教授然とした対面を保ちながらも、実は常勤の職に就けないままで、自分の男性関係が上手く築けないことを他人のせいにしつづける。そして、次女のジェーンは実業界の成功者でありながら、バイセクシュアルというアイデンティティを完全に受け入れられ

ない。戯曲の終盤近くの第11場に至り、ジェリーはジェーンを「私は普通じゃないけど大丈夫、たぶんお姉ちゃんも普通じゃないけど、大丈夫だよ」(72)と諭そうとするが失敗に終わる。そして、彼女はパーティの翌朝、ドイツへと発つことを告げ、姉妹のおもちゃとして使われた後、長期間屋根裏に放置されていた、母のものとされるパールのネックレスを破壊してばら撒き、終幕を迎える。

ここまでを確認した通り、小劇場向けに創作された『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』では、大手出版社クノップフからペーパーバックで出版され、後にアメリカ人セレブリティ、オプラ・ウィンフリー (Oprah Winfrey) の推薦図書となる、大衆向け小説に見受けられるゴシック色の強いセンセーショナルリズムは抑制されている。本章では『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』に描かれる屋根裏、そしてパーティのイメージを検証してきたが、実のところ、マクドナルド作品に屋根裏部屋が登場するのは、この戯曲が初めてというわけではなかった。読者はさらに時代を遡り1990年に初演された戯曲『アラブ人の口』において、より直接に『ひざまづいて』の屋根裏のイメージと結びつく、ゴシック的な屋根裏のイメージを、見出すことができる。次章では、『アラブ人の口』に遡って、『ひざまづいて』に顕著に表れるゴシックの源流をたどりたい。

3. 屋根裏部屋の「怪物」——『アラブ人の口』の場合

前章で検討した『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』に先立ち初演された『アラブ人の口』には、『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』、そして翌年に出版された『ひざまづいて』の双方に見出すことのできる類似性が存在する。マクドナルドが1990年に『アラブ人の口』の取材で訪れていたアイルランドで、友人の演劇関係者モーリーン・ホワイト (Maureen White) に小説を書くことを勧められ、取り組んだ結果が『ひざまづいて』であること (Tihanyi 21-22)、前章冒頭で述べた通り、『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』の執筆時期は小説のそれと重なるであろうことを考えれば、この双方向につながる関連性はそれほど不思議ではない。実のところ、女性の自立や、屋根裏部屋に隠された家族の秘密、家の相続を扱う点、母親を比較的早くに何らかの形で失う3人の兄弟姉妹を持つ家族が中心に据えられているという点は、3作品に共通する。

まず、時代設定は、パイパー家の姉妹の両親であるジェームズとマテリ

アが駆け落ちする時期に近い1899年4月である。また、その地理的設定はスコットランドのエジンバラ近郊の海岸沿いの屋根裏部屋を持つ館、ベル・モラルとされている。この設定は、大陸こそ異なるが、スコットランド系文化が支配的な、ケープ・ブレトン島の海岸部に建てられたパイパー邸の登場を予期させる。そして、『アラブ人の口』は、以下に検証する通り、後に『ひざまづいて』に見出すことができる、読者やオーディエンスの注目を引き付けるゴシック的な異形に富む。本稿が取り上げる3つの作品に登場する屋根裏部屋シーンが、1847年に出版されたシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) の手になるゴシックの名作『ジェーン・エア』(Jane Eyre) に存在する屋根裏部屋のイメージを再機能させていることは明らかである。ただ『アラブ人の口』と『ひざまづいて』は、物語の中で女性を屋根裏部屋に長期間監禁することにより、1970年代のギルバートとグーバー (Gilbert and Gubar) のフェミニスト・イギリス文学批評のタイトルによってひときわ目立つ存在となった感のある「屋根裏部屋の狂女」(The Madwoman in the Attic) バーサ・アントネット・メイソン (Bertha Antonetta Mason) のイメージを、より強く保持するようにも思われる。

マクドナルドは、パイパー邸の屋根裏で父にレイプされ監禁された長女キャスリーンに双生児を出産させる。一方で、彼女はマッカイズック家 (the MacIsaacs) の住まいの屋根裏では、科学者として身を立てようと奮闘する主人公パール (Pearl) の父親ラムゼイ (Ramsay) に、自分の妻レジヌ (RéGINE) の産んだ女兒を、名前も与えないまま監禁させる。それは、出生の27年後にようやくクレア (Claire) と名付けられることになるこの女兒が、犬のような耳を持っていたからだ。従って、この女兒と双子として生まれたヴィクター (Victor) は、単にパールの弟として育つ。さらにラムゼイと友人のリード医師 (Dr. Seamus Reid) は、レジヌを尼僧として隠し、死んだことに偽装する。彼女の悲しみは、迷信深いパールの父方のおばフローラ (Flora) が、妖精のものであると信じる不思議な声として作品中にあらわれる。物語中繰り返される墓場の場面とともに、夜になると聞こえる神秘的な妖精の声は作品のゴシック性を高める。さらに、パールのパートナーを介さない子ユージン (Eugene) の超自然的妊娠、海岸における古代エジプトのヒエログリフの発見、エジプト神話の冥界の神アヌビス (Anubis) の夢、さらにクレアの犬のような耳は、レジヌやパールの懐妊にアヌビスが関与している可能性を示唆している。特に人間と異種・異界の生物や「もの」との交雑による新生物の誕生

は、フランケンシュタインの例を挙げるまでもなく、ゴシックにしばしばみられる題材である。

また、ここに登場する双子モチーフは、『アラブ人の口』と『ひざまづいて』に共通する。これらはネタ・ゴードン (Neta Gordon) が2005年の論文において指摘する通り、マクドナルドがその総督賞受賞作品でパロディ化したウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の影響下にあるものであろう (160-61)。そして、先ほど紹介したクレアをふくめて、双子の登場人物——精神病質で犬恐怖症を抱え、劇中にショック状態に陥るものの仮死状態から蘇る小説家志望のヴィクター、洗礼中の事故で死亡し、パイパー邸付近に幽霊として憑りつくアンブローズ、そして片足に麻痺という異形を負って生き残ったリリー——は、その超自然的な人物設定を通して、作品のゴシック化に大きく寄与しているといえよう。

クレア発見のきっかけの一つは、リード医師が切断し、標本としてホルマリン漬けにし、パールに貸し出した自らの片耳を取り返すべく、クレア自身が階下にあられることである。こうした身体の切断は、クレア自身の人畜の合体した肉体とともに、典型的にゴシック的なモチーフである。加えて、長期にわたる人間としての教育やケアの欠如のために、言語に加えて人間的な習慣や様相を欠いた髪の乱れたクレアの姿は、バーサの姿とともに、出産後精神のバランスを崩し「精神も体も緩んでしまった」(37) マテリアの姿を強く喚起する。

この作品の主人公のパールは、19世紀後半に生まれたマテリアと同時代人であるが、まったく異なる生き方を示す。『アラブ人の口』は、時代設定を考えれば不思議ではないが、3作品の中で唯一性的マイノリティの問題に触れることがない。ただ、科学者としての成功を目指し、独身を貫くパールの生き方を通して、他の作品と同様、女性の自立の問題に取り組む。『ひざまづいて』においては10代前半で結婚したマテリア、さらにはその長女キャスリーンが、夫や父など男性の言いなりとなることで自由を奪われ、死に追い込まれていくのとは対照的である。現代科学の洗礼を受けたパールは、自らの力が男性に劣らないことを信じ、戯曲第13場を示される年長の男性の決定に従わない (33)。異形を生み出した血を絶やすために子を産まない場合に限りパールに相続を認める父や、年長で子を望まない自らと結婚してベル・モラル館を相続することを求めるリード医師などの意向を拒絶するのである。そして、パールの拒絶は、単なる抵抗に終わらない。パールは、父と医師が母と妹に対して犯した不正を公表する

と医師を脅すことで、自らの希望、つまり父親不明の子の妊娠を継続し、異形を持った双子の弟・妹や家族とともに、そのまま生家で生き続けることを押し通すことに成功するのだ。

パールの決意をあらわすのが、彼女自身の手により、雑誌『エジンバラ、ふつうのこともありえないこと』(*Edinburgh Journal of Rules and Exceptions*)の表紙用に、戯曲の最後、第17場に撮影される、パール、ヴィクター、おば、そして身支度を整えたクレアの4人が写る奇妙な家族写真『団結』(*Aonaibh Ri Cheile*は英語でuniteの意)である(79)。この雑誌のタイトルは、『ありえないこと、ふつうのこと』(*Die Ausnahme und die Regel*ないしは*The Exception and the Rule*)を書いたドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒト(Bertolt Brecht, 1898-1956)へのオマージュであろう。ブレヒトは実は『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』のジョジョの研究対象でもある点にもここで言及しておく。

では、『アラブ人の口』におけるパールの生き方は、マクドナルドの作品世界においては、同時代人ではなく、誰に引き継がれたのであろうか。筆者は、彼女の生き方は、同時代の女性ではなく、時空を超えて20世紀前半のノヴァスコシアにおいて、自らの性を主体的に生きるマテリアの3女フランシス、さらに時代を下って20世紀後半のオンタリオを生きる『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』のジェリーに引き継がれたのだと考える。フランシスは酒場で音楽とともに性的娯楽サービスを男性たちに提供し、リリーのために蓄財する一方で、自らの意思で男性を選択し、彼をレイプする形ではあるが、自らの意思で妊娠し、未婚の母として、パイパー家の血を次世代に繋ぐ。20世紀後半を生きるジェリーは、男性看護師から精子の提供を受けることで、より洗練された方法ではあるが、同様の行動をとる。どちらも自分の父に使用されていた男性を、自らの子の父として選択している点は偶然だろうか。自らの意思で、自らの性と生をコントロールして生きようとする女性像は、そのような女性たちに対する抑圧を表象し得るゴシック形式と共に、演劇、小説というジャンル、創作時期を超えて、マクドナルドの作品世界を貫いているといえよう。

まとめにかえて

本稿は、アン＝マリー・マクドナルドの小説『ひざまづいて』を、先行して上演された戯曲作品『アラブ人の口』と『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』それぞれと比較し、マクドナルドの作品世界において、繰り返し使用される表象やテーマの起源を検証した。本稿は特に、家族の秘密が隠される屋根裏部屋、そしてその秘密の表出である家族や家屋、そしてその周辺にあらわれるゴシック的な異形にも注目した。

検証の結果として3つの作品には次のような関係が存在することがわかった。本稿第3章冒頭と重複する部分もあるが、ここでもう一度確認したい。3作品は、1990年初演の『アラブ人の口』以来一貫して、家族の秘密が隠された屋根裏部屋のある家に棲む、母親を比較的早くに失う3人の兄弟姉妹を持つ家族をめぐる展開する。そしてこれらの作品は、女性の自立にまつわる諸問題に取り組む点でも共通する。一方で、性的マイノリティの問題を正面から取り扱うのは、初演（1995）・出版（1996）の時期に近い『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』と『ひざまづいて』のみである。また、当主の3人の子供に男性が含まれる点、設定がカナダ国外に置かれている点は、『アラブ人の口』のみに存在する特徴である。このように、『アラブ人の口』には、2005年に同戯曲を改定することで生まれた戯曲『ベル・モラル』（*Belle Moral: A Natural History*）以外の後続の戯曲には含まれない特徴もある。

そして、3作品に共通する屋根裏部屋に秘められた家族の秘密が、幽霊や妖精、異種交雑の「怪物」という超自然的な存在や、血まみれの遺体、オープンに頭を突っ込んだ姿の変死体といった、あからさまにゴシック的な異形をとって表出するのは、『アラブ人の口』と『ひざまづいて』のみである。双子のモチーフが登場するのも、この2作品に限られる。これらの共作『屋根裏、真珠、そしてすばらしきファイン三姉妹』にはなく、マクドナルドの単著により強くあらわれる特徴は、ブロンテ姉妹由来のゴシック的イメージ、そしてシェイクスピア由来の双子モチーフなど、読者にわかりやすい英語文学古典との戯れこそが、マクドナルドが1988年の劇作家デビュー以来保ち続ける魅力のひとつであることをつたえる。

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金（若手研究B、研究課題名「ポスト・インダストリアルのアトランティック・カナダ文学

ーリチャーズを中心に」、JSPS 科研費 JP16K16788) によって可能となった。関係者各位に感謝を述べたい。

注

- (1) ここに引用した『グローブ・アンド・メール』紙の批評は、マクドナルド自身の公式ウェブサイト annmarimacdonald.com に転載されたものを参照した。最終更新 2016 年、アクセス日 2017 年 12 月 20 日。

Works Cited

- Gordon, Neta. "Twin Tales: Narrative Profusion and Genealogy in *Fall on Your Knees*." *Canadian Review of American Studies* 35.2 (2005) : 159-76.
- Brewin, Jennifer, et al. *The Attic, the Pearls & Three Fine Girls*. Winnipeg: Scirocco Drama, 1999.
- Davies, Robertson. "How to Design a Haunted House." *One Half of Robertson Davies*. Toronto: MacMillan of Canada, 1977. 75-85.
- Gilbert, Sandra M, and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Lockhart, Melanie Lee, and Ann-Marie MacDonald. "'Taking them to the Moon in a Station Wagon': An Interview with Ann-Marie MacDonald." *Canadian Review of American Studies* 35.2 (2005) : 139-57.
- MacDonald, Ann-Marie. *Adult Onset*. Toronto: Vintage Canada, 2014.
- . *Belle Moral: A Natural History*. Niagara-on-the-Lake, ON: Playwrights Canada, 2005.
- . *The Arab's Mouth*. Winnipeg: Blizzard, 1995.
- . *Fall on Your Knees*. Toronto: Knopf, 1996.
- Tihanyi, Eva. "Jane Eyre in a Cape Breton Attic (Interview) ." *Books in Canada* 25.8 (1996) : 21-23.
- Sugars, Cynthia, and Gerry Turcotte, eds. *Unsettled Remains: Canadian Literature and the Postcolonial Gothic*. Waterloo, ON: Wilfrid Laurier UP, 2009.
- ターコット、ゲリー。「英系カナダのゴシック」『増補改訂版 ゴシック入門』マリー・マルヴィーローロバーツ編、神崎ゆかり他訳、英宝社、2012。